

結果である。

8. 赤外線電球の経年変化

現在使用の電球（ナショナル赤外100～375）について特性の劣化はないか調べた。この種の電球寿命は約6000時間とされているが、二寒候期使用のものと新品のものを、先の温度特性と同じ方法で比較してみたところ、第11図に示すように、二寒候期使用で若干の劣化がみられるが、照射電球の光にも部分的な明暗のムラがあり、黒球温度計（球部）の測定位置にも問題があるので、その程度は明確でない。

9. 結 び

以上本調査テストの概要を述べたが、障害時の例で述べたような最悪条件下では完全に着氷を防止しきれないが、7の効果（月別効果日数）より有効率を求めると、

昭和44年（68%）、昭和45年（56%）、昭和46年（79%）となり、更に昭和46年1月～3月迄を算出した場合は照射有効率85%の高率を収めた。

この着氷防止装置を用いる以前の風観測において観測者が観測時毎に凍結した屋上に出て暴風の中で、風速計に熱湯をかけて着氷を除去していたのと比べると、準高層資料を連続的に蒐集することが可能となり観測者の労苦をも著るしく軽減されるに至った。

この試験の遂行に当っては、伊吹山測候所、彦根地方気象台の伊吹山頂勤務者の全員が当った。業務上多大な理解と協力を載った大阪管区気象台並びに各種赤外線電球の試作援助を賜った松下電器産業（株）特殊電球事業部など各位に深く感謝する次第である。

【新刊紹介】

J. R. Holton: An Introduction to Dynamic Meteorology (International Geophysics Series Vol. 16, 1972, Academic Press, 5, 700円)

久方振りに気象力学の教科書が出版された。著者は新進の俊秀な気象学者で、米ワシントン大学での lecture note をまとめたものである。一口にいうと、大規模大気じょう乱を中心とした気象力学について書かれてあり、最近の発展までふれた新鮮な内容の本である。目次を紹介すると

- 第1章 序 言
- 第2章 運動量方程式
- 第3章 水平運動方程式の初歩的応用
- 第4章 連続方程式
- 第5章 循環とうず度
- 第6章 プラネタリー境界層
- 第7章 中緯度のシノプティック・スケール運動の診断的解析
- 第8章 数値予報
- 第9章 大気振動：線型摂動理論
- 第10章 中緯度シノプティック系の起源と運動

第11章 大気大循環

第12章 熱帯運動系

本書の前半は、これ迄の教科書と大同小異だが、第6章以下は大変新しい内容で本書の特色を示しているといえよう。だから大規模運動についての気象力学を勉強したり、復習するのに適していると思う。しかし全体として物足りない気もするが、それは気象熱力学の記述が著るしく不足していることや定義しない専門語を用いていることなどによる。また中小規模じょう乱などにはふれられていない。紙数の都合で詳しい書評ができないが、Bull. Amer. Meteor. Soc., Vol. 53, No. 11, Nov. 1972に出た Spar 教授の丁寧な批評は参考になると思う。学部4年生、修士コースの学生や若い気象技術者、研究者に一読をおすすめしたい。各章尾の問題を手がけてみるのも気分の転換によいだろう。

（気象庁電計室・新田 尚）